

## 近世土佐藩の総合開発と築港技術

——野中兼山の政策を中心に——

安彦正一

はじめに

1. 兼山の事歴と藩事情

2. 兼山と南学の思想

3. 兼山と土木事業

(1) 国土開発と新田政策

(2) 築港と港湾開発——手結・津呂・柏島の諸港

4. おわりに

はじめに

戦後我が国の港湾論研究は、著しい進展を見せている。<sup>(1)</sup>それは、総じて現実問題を中心としたテーマを取上げ、多くの分野で明らかにされてきた、と思われる。最近では、港湾経営の問題から、高度情報化社会における港湾とコンピューターとの関連、或いは、経営財務の側面からの分析もみられる。<sup>(2)</sup>

ところで、これら研究過程で立遅れた分野は港湾史ではなからうか。なかでも、近世の港湾技術を中心とした港湾修築・技術と主体者間にどのような関連があるのか、さらには、政策全体からどのように位置づけられるのかについては明らかでない。

したがって、本稿はそれらの諸点を踏まえ土佐藩の諸政策を展開過程の中で把え、その政策主体者野中兼山の役割などを評価することを目的としたものである。

いうまでもなく、政策主体を諸史料からみるかぎり、それぞれの政策には共通した点が見出せると思われる。また政策観は主体者それぞれの個性があり具体的政策にもかなりの差異がみられる。いずれにせよ、近世土佐藩の執政者野中兼山は築港史においては取上げられる人物である。そのことは、近世における築港史の上での位置づけにもなるとと思われる。

まず、伝記的に野山兼山について描写しておきたい。

注(1) 戦後の港湾論研究の文献として、寺谷武明「戦後における港湾論の発達」(「日本港湾史論序説」)時潮社 昭和54年 203～226頁が参考となる。

(2) 最近の港湾経済学会年報の諸論文、及び、西尾一郎編著「港湾経済論」創元社、所収論文等を参照されたい。

## 1. 兼山の事歴と藩事情

野中兼山は、土佐藩二代目藩主山内忠義<sup>(1)</sup>に仕え、寛永4年(1627)野中家の跡を継いでから以後三代藩主忠豊の治世の弾劾によって失却するまで、前後30年の長期にわたって土佐藩政の確立に甚大な影響を及ぼした政治家である。<sup>(2)</sup>(事歴関係については後表を参照されたい)

兼山の伝記によると<sup>(3)</sup>「野中良継、名を止、通称伝右衛門といい、後に主計又は伯爵と称した。号は兼山・高山。祖父良平、父良明、母秋田氏、名は万、元和元年姫路に生る。以後、万に訓育され、養父直継が没するや、良継執政職を継ぎ、祖父の采邑長岡郡本山6千石を領す(時に22才)」といわれている。寛文元年(1661)には、知行千石を加増せられ与力郷士50人を附与せられ禄一万石に及んだといわれ、寛文3年(1663)解任されるまで主君たる山内氏や、土佐藩を牛耳った。

然らば、次に兼山がどのような政策を展開をしたかを概観するに当り土佐藩の事情を若干述べておく必要がある。

近世における領主財政の窮乏は、諸藩に共通した一般的傾向であり土佐藩としてその例外に洩れない。<sup>(4)</sup> 藩財政における赤字は、直ちに藩体制の崩壊を示めすものとは言い難いが、少なくとも財政窮乏の指標となり得る。

土佐藩については、平尾道雄氏の「高知藩財政史」<sup>(5)</sup>に、藩財政の苦慮している状態が描述されている。

こうした、藩財政の急速な赤字は諸藩に様々な対応を生みだしたのである。一般に平常化した財政政策は、倹約令と借知対策であった<sup>(6)</sup>が土佐藩財政の窮乏は幕府からの命ぜられた土木建築の助役<sup>(7)</sup>が大きな負担となっていた。それ故、京大阪の豪商から借入れる等藩経済にとって極めて苛重な負担となっていた。その為藩は積極的な産物振興の実施と、その最大限の利潤収奪による収入増加が計らねばならなかった。かかる基礎の上に立つ政策こそ兼山の計画した多くの諸制度の事業である。

さて、兼山は土佐藩の執政者として実に多くの事業を計画、実施した。ちなみに列举すると、<sup>(8)</sup> ①財政整理②財源の函養③租税制度の確立④専売制度の確立⑤商業貿易の統制⑥米価の公定及び貸米制度⑦産業組合制度・保険制度の創設⑧農業立国政策と兵農制度⑨植林奨励政策⑩新町の創設⑪殖産興業の奨励⑫水産事業の保護奨励⑬流水、開墾・築港事業⑭葬祭の改善と教育の奨励など、主なるものである。

以上に見られるように兼山の事業は多方面にわたっているが、すべて藩財政の安定強化策に結びつき、程度の差こそあれ防貧事業的性格を有していたことを窺い知る。この政策はほぼ寛永中期～明暦年中に実施され、幕藩制の基礎が築かれた封建体制の変化と軌を一にしていると見なせよう。以後再び万治～延宝年間には寛文元年の藩札発行に象徴されるように財政難とその補填が中心問題となっていくのである。

では、以上のような土佐藩の状況の中で兼山は、如何なる理念で政策を遂行したのであろうか、当然この政策意図及び理念なりをもって方向づけた問題を取上げなければならない。

以下、その点につき述べておきたい。

注(1) 「皆山集」土佐之国史料類纂 第3巻 高知県立図書館 昭和50年

190～240頁に詳細されている。

(2) 野中兼山についての文献の主たる著書として、松野尾儀行「南海之偉業」高知書林 明治26年、西内青藍「海南偉業史論」高知書林 明治44年、川添陽「野中兼山」高知県教育会、昭和12年、横川末吉「野中兼山」吉川弘文館、昭和37年などが参考となる。

(3) 兼山の伝記については注(2)の他、史料として近年刊行されつつある。「野中兼山関係文書」高知県文教協会、昭和46年、「皆山集」土佐之国史料類纂 全10巻などの刊行によって更に兼山研究もこれから進展するものと思われる。

(4) 平尾道雄「高知藩財政史」高知市立図書館 昭和28年を参照せよ。

(5) 平尾道雄「前掲書」 35～43頁

(6) 平尾道雄「前掲書」 99～120頁

(7) 山本大編「高知県の歴史」山川出版 昭和50年 25～30頁

(8) 川添陽「野中兼山」高知県教育会 32～120頁を参照せよ。

## 2. 兼山と南学の思想

兼山が土佐藩政に取入れた儒教思想は、南学といわれている。<sup>(1)</sup> 当時藩政は、禅学を中心としており、兼山も少年時代から父の禅学の影響を強く受けていたことは『兼山遺事略』に見られるが、<sup>(2)</sup> その少年時代から学んだ禅学の世界を脱し南学に転身したことは、社会的客観的な事実として明白に確認できる。例えば、兼山の唯一の書といわれる『室戸湊記』に示めされる哲学、<sup>(3)</sup> 彼の母秋田夫氏が急逝した時の儒葬、<sup>(4)</sup> 領民支配の「本山掟」「弘瀬浦掟」など<sup>(5)</sup>の諸事実は極めて重要である。それは、禅とは違った儒者としての立場を初めて土佐藩の執政に及ぼしたことにある。

では、何故に兼山をそのようにつき動かしてその南学への志向を決定的なものにまで至らせたのであろうか。

それは、彼の「剛介疾急人ノ過ヲ容レルアタワズ」といわれるような<sup>(6)</sup>気性の激しい性格と、「性質厳酷ニシテ非ヲ撃ツコト鷹ノ如ク」という<sup>(7)</sup>俗流に甘んじない孤高の峻しい点もある。こうした性格は一般に近世初期の封建支配者に見られるところであるが、もとより強調したい点は、彼の性格もさることながら将来の時代認識の把握があったと考えられる。<sup>(8)</sup>

さて、彼の南学への志向が現実的関心であるならば、その儒学思想が内面的な心性の世界に重点をおくより、むしろ強く外面的現実的な実践の世界に傾斜する。これは、彼の受容した儒学が趣味や修身に留まる学問ではなく、それは現実の改造に役立つ実学として選びとった学問である。事実、築港事業や総合開発などに活かされているのである。したがって、兼山は南学者<sup>(9)</sup>を保護する一方、自身の努力を含めて「学文仕られる衆」<sup>(10)</sup>と呼ばれる学者を中心に儒書を研究し、<sup>(11)</sup> 兼山の施政に大きな影響を与えた。ともあれ、より、その決断がむだに終らなかったのは、兼山の土佐藩における儒教道德実践がその後浸透した点を見ても明らかである。以上、南学の思想は兼山の信念として各事業の指導理念として活かされる。

以下 兼山の諸事業を検討していきたい。

注(1) 南学の起源は南村梅軒という学曾が、天文年間周防国から土佐へきて豪族に儒学を教えたことから始まるといわれる。『吉良物語』、寺石正路『南学史』 昭和9年参照

(2) 『兼山遺事略』によると「御若年の時は禅学を被成、活則をぬけ給ふと申す。中々御器用なりと承る。良明公常に禅を好給ふに依て跡を慕ひ思召て禅に入れ給ふと被仰云々」 15～16頁

(3) 『野中兼山関係文書』 高知県文教協会編 昭和46年 150～155頁

(4) 『前掲書』 180～182頁

(5) 『皆山集』 第5巻 125～140頁

(6) 『皆山集』 第4巻 121～123頁

(7) 『先哲叢談』(『兼山文書』所収)

- (8) 『野中遺事略』で小倉弥右之門は、兼山に儒学でなければ天下国家は治らぬと云えたといわれる。『朱学伝来記』等を参照
- (9) 寺石正路『前掲書』によると当時、小倉弥右衛門、山崎闇斎、長沢潜軒らの学者をおいたという。279～281頁
- (10) 『安積次郎作書状』（『兼山関係文書』に処る。）
- (11) それらの儒書は「自省録」「中庸集略必改」「詩仁説」「刑経興」などを研究用にしたという。寺石正路『前掲書』282～283頁

### 3. 兼山の土木事業

#### (1) 国土開発と新田政策

兼山の実施した各種政策で、最も力を集中したのは、土木事業の中でも、開墾、築港事業である。その点を『南海之偉業』は、「兼山の事業の生涯は土木事業家であったといってよい」<sup>(1)</sup>と、述べている点は兼山の土木事業に対する熱意が感ぜられて興味深い。

本論では初めに、開墾開発政策について述べ、併せて、後半では築港事業について触れることにしたい。

周知のように幕藩制の成立期における耕地の開発過程は、戦国大名の政策を継承した開発促進政策である。<sup>(2)</sup> いうまでもなく、一般に直接生産者が自力で水田の開発を行う場合その開発の対象となりうる地域は限られ、その規模も小さく、そこでの生産も不安定である。このような小農の耕地開発を飛躍的に発展させたのは各地の領主による土木灌漑工事である。『明治以前日本土木史』<sup>(3)</sup>によると、慶長～寛文期にかけて灌漑施設の増加とともに土木灌漑工事がめざましい躍進を示していることは表1によって明らかである。土佐藩についても、古くは「長宗我部地検帳」<sup>(4)</sup>から多くの開発事業を窺い知り得る。その後、山内氏入国後も国土開発は促進されるがもっとも強力に推進したのは兼山である。

兼山は、前期の工事を受け継ぎ、執政者として大規模な土木灌漑工事を各

表 1 灌漑工事等の進行状況

時代	溜池	用水路	計	開発
国初より天文年間迄	46	24	70	—
第1期 天文20年～ 慶長5年迄	3	11	14	14
第2期 慶長6年～ 慶安3年迄	66	55	121	122
第3期 慶安4年～ 元禄13年迄	93	121	214	220
第4期 元禄14年～ 寛延3年迄	27	52	79	102
第5期 宝暦元年～ 寛政12年迄	23	31	54	88
第6期 享和元年～ 慶応3年迄	99	139	238	450

(注)「明治以前日本土木史」による。

地で進捗する。

その場合、領主を施行主体とする土木灌漑工事の特徴は、従来郷単位で完結していた小規模な用水施設の枠を破って、広域を灌漑する大規模な用水路の建設を前提にしたところに兼山の開発政策の特徴が見出せる。

さて、表2は兼山の執政期間に建設された用水路であるが、実に多くの堰と、これを横断する堰堤の建設は、彼が指導、工事を竣工させたものである。

兼山をしてこのような、広域灌漑を可能にしたのは、新しい灌漑技術が採用されたことにもよるが、むしろ土佐藩を統一的に掌握した政治権力のもとでこそ地域的な広がりをもつ大規模な用水路建設が可能であったのである。したがって、その工事に必要とする膨大な労働力を領内農民によって使役させたことは、兼山の農民掌握の結果であった。

兼山は「室戸湊記」<sup>(5)</sup>の一節で「賢君の其民を労する所以、其民を逸する所以、皆其道を得たる他」と彼の事業が領民の労役によらねばならないことを認めるとともに、その結果が領内の経済開発となり領民の繁栄を生みだす



表 2 兼山時代の用水路

用水路名	建設年代	所在地	灌漑面積
宮古野溝	寛永15年(1638)	土佐郡森村吉野川流域	14町
長岡郡本山地方用水	不明(森川は承応3年)	長岡郡吉野川流域	80町
山田堰	寛永16年-寛文4年(1664)	香美郡物部川本流	
上井川	正保2年(1645)	香美郡・長岡郡物部川流域	127町
中井川	寛永16年(1639)	同上	435町
舟入川	万治3年(1660)	同上	800町
父養寺井川	明暦元年(1655)	香美郡物部川流域	42町
野市上井川	正保元年(1644)	同上	460町
同下井川	寛文4年(1664)	同上	200町
弘岡井筋	承応2年(1653)	吾川郡仁淀川流域	862町
八田堰	慶安元年(1648)(開始)	吾川郡・高岡郡仁淀川本流	
鎌田堰	万治2年(1659)	同上	
鎌田井筋	明暦2年(1656)(一部)	高岡郡仁淀川流域	687町
幡多郡諸用水	不明	幡多郡四万十川・松田川流域	165町
中筋川改修	万治2年(1659)	幡多郡四万十川流域	
灌漑面積合計			3,872町

(注) 辻・小関「野中兼山全」による。

と考えていた。この信念こそ彼が南学より得た儒教の仁政思想に連なるものである。その場合、土木灌漑工事を推進した領主の直接的な関心は農民支配の強化であったことは否定しえない。<sup>(6)</sup> その具体的内容は、兵農分離を前提とする米納年貢の増徴であり、それを可能ならしめるには新田開発における生産力発展が要求される。その狙いをもつ領主の開墾新田政策は、農業の生産基盤の拡大、強化を中核として、大規模な用水施設の創設などがなされたといえよう。この地域における大規模な用水は、(表2)によって明らかのように、寛永15年(1638)頃から開発しはじめ寛文4年(1664)まで至っている。なかでも物部川<sup>(7)</sup>・仁淀川筋の開墾<sup>(8)</sup>は最大といわれ、物部川については「水田526町、畑宅地87町を得る世に野市5千石と称す」<sup>(9)</sup>とある。これらの新田開発においては、開発地域の隷属的な農民が開発に従事したことは



当然であるが、兼山は郷士を新田開発と結びつけたところに特徴を見出すことができる。<sup>(10)</sup> ちなみに郷士が取立てられた点は『香我美郡野市村根源』に「正保元年に中井関御普請出来、夫より用水掛りに相成、百人衆に郷士を召出され」<sup>(11)</sup>と散見され、この期に郷士起用に成功した兼山は、承応2年(1653)に再び第二期の郷士起用を開始する。<sup>(12)</sup>

ところで用水路の工事は、四つ枠構築法が採用された。『南路志』<sup>(13)</sup>にはこの点について「四つわくにして長・横一間づつにわり合せ二通立、よこにぬき入、石持のゆかをゆひ、壹間の間四方へ次第に長杭を立て、夫に石をつめ入れせき申され…略…」とあり、この工法を工事に採用したことは兼山の自然に挑む技術の段階を示すものであり、兼山の合理主義の発現であろう。<sup>(14)</sup>かくして大規模の新田は開発され「溝梁大小三十流、主要なる幹線の延長通計三十余里、舟筏を通じるもの五流、灌漑面積四千余町歩」<sup>(15)</sup>に及んだとされる。

以上、兼山の総合開発の事例として新田、開墾政策について述べたが、兼山の土木事業として必要不可欠なのは築港技術である。

次に港湾の修築及び技術などを検討したい。

注(1) 松野尾儀行『南海之偉業』高知書林 明治26年 20～22頁

(2) 木村礎『近世の新田村』吉川弘文館 昭和39年 4～6頁参照

(3) 土木学会編『明治以前日本土木史』岩波書店 昭和11年 250～251頁

(4) 横川末吉『長宗我部地様帳の研究』高知市民図書館 昭和30年 参照されたい。

(5) 高知県文教編『野中兼山関係文書』同協会刊 昭和46年 同書に『室戸湊記』が所収されている。

(6) 横川末吉『野中兼山』吉川弘文館 昭和37年 119頁

(7) 物部川の開拓事業については、彼の養父直継が既に開始していたといわれる。直継の野市村庄屋久介宛書状に見られる。『皆山集』4巻参照されたい。

- (8) 辻重忠・小関豊吉『野中兼山』富山房刊 明治44年 50～51頁
- (9) 『藩志』 内編 141頁
- (10) 入交好脩「土佐藩に於ける郷土制度」の成立過程（『徳川幕藩体制解  
体過程の研究下巻所収』）233～310頁に詳細されている。
- (11) 入交好脩稿「前掲書」240～245頁
- (12) 淡輪四部兵衛『淡輪記』「彼は郷土出身の代表的下級役人で、兼山の  
下で力を貸し取立てられている。」同書を参照されたい。
- (13) 『南路志』 高知市民図書館 第7巻
- (14) 横川末吉著『前掲書』吉川弘文館刊 85頁
- (15) 辻重忠・小関豊吉「前掲書」富山房刊 明治44年 79頁

## (2) 築港と港湾開発——手結・津呂・柏島の諸港

幕藩体制の全国市場は、大阪、京都、江戸を中心に中央市場を領域市場の二重構造で成り立っていた。<sup>(1)</sup>

わけでも、江戸、大阪間には商品の海上輸送が行われ、このルートは全国市場の大動脈となっていた。土佐藩でも領域は独自の経済圏を志向しつつも全国市場を共通の基盤とし、特にその中軸として中央市場（大阪）との流通関係を結びつつ形成されていった。<sup>(2)</sup> それがため各藩は貢租米の廻送、江戸・大阪などへの日用必需品輸送の必要<sup>(3)</sup>から沿岸航路の開発及びその為の、港湾の開発に努めたのである。

だが、我が国においては築港と称するものは少なく、今日その形態とするものは概して海面の埋立てより得たる土地及び小型の船溜に過ぎなかったのである。又その規模についても船舶の設備を施行した港湾は少なく小さいため小さな和船のみの収容せるものであった。<sup>(4)</sup>

土佐藩についてみれば、藩領内の地域は、南海道の僻地にあり中央の文化圏に離れ、東と南と西の三面は海、北は四国山脈にさえぎられ、他の地方との交易は海運に依存する手段しかなかった。したがって、幕藩体制が確立していく過程で沿岸航路は早くから発達を促し、単に体制側からのみだけでなく、むしろ漁業技術や商品流通の発達によって、それまでとは違った生産

活動がなされるようになり、国内資源の開発と他国産業の導入によって領内の自給度を高めるとともに、その生産物を上方中心の全国的な商品市場に結びつけるという政策であったことに注意されよう。<sup>(5)</sup> したがって、上方との交易に近い、室津・津呂港など室戸岬附近の港湾の積極的な改修が望まれたのである。

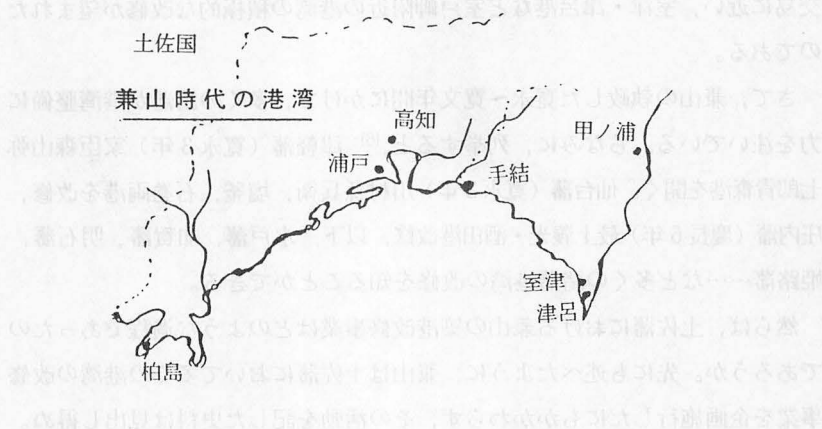
さて、兼山の執政した寛永～寛文年間にかけて、多くの諸藩が港湾整備に力を注いでいる。ちなみに、列举すると、<sup>(6)</sup> 津軽藩（寛永3年）家臣森山弥七郎青森港を開く。仙台藩（寛永3年）川村孫兵衛、塩釜、石巻両港を改修、庄内藩（慶長6年）最上義光・酒田港改修、以下、水戸藩、加賀藩、明石藩、姫路藩……など多くの諸藩港湾の改修を知ることができる。

然らば、土佐藩における兼山の築港改修事業はどのような過程であったのであろうか。先にも述べたように、兼山は土佐藩において多くの港湾の改修事業を企画施行したにもかかわらず、その活動を記した史料は見出し得ぬ。ただ築港関係の史料として兼山唯一の著とされるのは『室戸湊記』だけであるが、それすら故史料の制約によって明かになっていない点が多い。いづれにせよ、必要な限り検討しておきたい。

「野中兼山先生の遺業」は次のように述べている。<sup>(7)</sup> 長文をいわず引用すると、兼山は「実に世にもたぐひなき秀でた技術家、むしろ土木の権化ともいふべき人間わざではない、と思われるほど素より当時に施て学術上よりわり出され得るべきでなく、世界各国においてもかかる思想としては未だ夢にも見得られなかった時に当り独得の識見によりよく深遠なる数字と工学の原理にかない、却って今日の専門技術家が驚嘆する所の土木事業を興こし流水に、築港に、堤防に、その他少しの違算なくこれを大成し、後世の今日その基礎として、旧態を改めざるのみならず万代の後まで主要部の変更を許さるべきは、確かに最高技術上の能力を有する事を物語るものである」と、やや誇張する面もあるがずばりの指摘であろう。とくに兼山が藩政に関与する以前においては「古来築港の必要を感じることに切なりしも、工事極めて難しく徒に手を拱きて長大見する外、なかりしが」という状態であったが、彼が執政するやいなや積極的に築港の改修、拡充が進み、各地の築港工事に対す

る指導と統制が強化されて、支配体制が形成されていくのである。

兼山時代の築港は、幡多郡柏島港、吾川郡浦戸港、香我美郡手結港、安喜郡室戸の各港である。

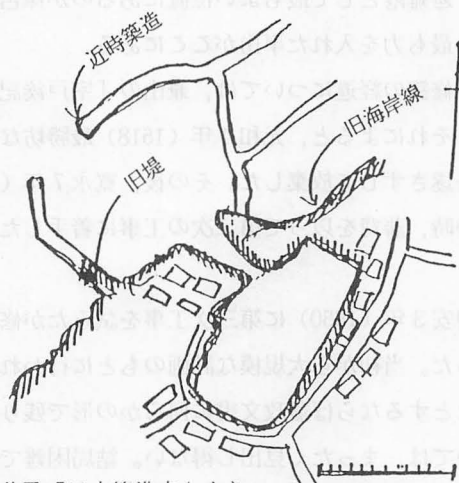


①まず手結港について述べる。

『手結浦日抄』<sup>(8)</sup>によると「慶安4年卯年より堀始めて漸湊形に成ケレハ御国中郡寄夫ノ御作配アリテ終ニ承応ニ己年夏4月迄三ケ年オ経テ湊全成就、予祖父関右衛門湊番役仰付候」とあるように手結港の改修はもっとも古いものである。

手結港は、土佐国香我見郡にあり、浦戸港と相対し、その距離は五里という近くにあり、修築の目的は東風の暴風に際し浦戸港に入ることが出来ない漁船のための一時の避難の便を与えるための港湾とされ、古記に依ると、手結港は、以前小さな築造がなされたことが記されているが、<sup>(9)</sup> 兼山の時代には港は埋没され見るべき姿もなく港湾としての機能を果していなかった。その後、兼山が築港した手結港は「図1」に見る様に、南北62間東西27間の船入場にして深く陸地を堀削したのである。従って長さ40間、幅8間の開渠にして海に通じさせた。なお注目すべきは、港の入口左右に突堤を築き、相応の水深に達しさせ、なお左側には別に一条の防砂堤を築造して南方より入る砂礫に対して備えたのである。完成は明暦元年とされるが、先に述べた「手結浦日抄」には承応の成就とあるが恐ろしく修築の誤りではないのだら

図1 手結港



広井勇「日本築港史」より

うか。いずれにせよ、工事の規模の程度はさておき、どの程度の人数を工事に要したのであるうか、またどのような役割を果たしたのか史料的に詳細は得られない。

しかし、兼山が手結港にのぞんだ態度には、当代の土佐藩の執政者として土佐藩港湾の修築を目ざす気概は充分にあったと推測される。

ともあれ、手結港の完成した明暦の頃には在郷商人の活動が活発化し、忠義が植木一郎兵衛に与えた書状には、上方商人、上方市場から影響を受けた安喜郡海岸地方の諸港から廻船で木材を運ぶ商人の活躍が伝えられている。<sup>(10)</sup>そこにはどこの港から積出したかが明らかにしえぬが、恐らく手結港か浦戸港ではないかと推定される。こうした藩営商業の拡大<sup>(11)</sup>は手結港の完成を急がせたことは否定できない。

②次に津呂港について述べる。

津呂港は安芸郡の東南端室戸岬にあり、地理的には遠く太平洋に突出している所から、俗に“お鼻”と呼ばれ、兼山が最も力を入れた港湾である。目的は、主として高知より東上する船舶の避難港としての性格が強く、室戸岬

附近で天候の変で遭遇した場合、船舶は北九里にある甲浦に入るか、若しくは一六里逆行して浦戸に帰航するかである。しかし危険を冒かして前進する以外他にない故、避難港として最もよい位置にあるのが津呂港である。従って土佐藩としても最も力を入れた事由がここにある、

さて、津呂港の修築の経緯については、兼山の「室戸湊記」<sup>112</sup>に簡潔にまとめられている。それによると、元和4年（1618）最勝坊なる者が自費で修築を試みたが功を遂さずして放棄した。その後、寛永7年（1630）兼山の養父直継が奉行職の時、藩費を以って第二次の工事に着手したが目的を遂さず中途で失敗。

さて、兼山は慶安3年（1650）に第三次工事を試みたが修築は必ずしも順調に進行しなかった。当初から大規模な計画のもとに行われたか、或いは工事が順調であったとするならば藩政文書に何らかの形で残り得るであろうが前記の記録については、まったく見出し得ない。結局困難であるとの判断で中止をし、先に述べた手結港の改修を完成した後、寛文年間再び第四次の工事を試みたのである。

まず、安積幸長、衣斐勝元、野村成正を設計担当にし、井上康重、井口延光に製図を担当させ、兼山自から総奉行となり、築港の理由書、請願書などを附帯し、江戸に上り幕府に願ひ出た。幕府の許可するところとなり工事に着手したのが慶安4年である。兼山の慎重な工事の取組がここに示されている。

既に見たように津呂港の工事は難工事といわれ、兼山も画期的な工法を採用した。それは一般に奇策扇式の水止と呼ばれ、扇形に暗示を得たといわれ、海面の一点に要の位置を撰らび、要に向って海岸4ヶ所から四線の堤防線を定め、一線毎に松の大材木を四列に立て、四列を要に向って櫛の歯の縦列の如く延ばしていくのである。四列の間は大小材に絡ぎ、濃密に交叉して土俵に埋め、空間には土砂を詰め、この重厚の四線の堤防を要の位置に結合して扇形としたのである。更にその範囲内を予定の港内として三つの岩（本工事中困難をきわめたのは港口外における岩礁の除去にあった）を範囲内に抱込むと、次に範囲内を二分する線堤防を築いて、一方を三岩破壊区、一方を水



低堀削区とし、その間には二重の棧橋をかけ人夫の歩行用とした作業は面積の広い堀削区を先に行う。ところが問題点は、排水である。機械が無い時代人夫に汲出させるのである。それは文字通り人力を駆使し、桶、びんなどを持って汲み出し、排水が終ると、一転して堀削作業を行う。無数の大のみ、金槌で予定の港湾の岩盤を堀削する。その「役夫数千」といわれ短期間に設計の深さに堀削せねばならない。こうして予定の深さまでに平坦な海底にならし終ると、兼山は引き潮時を待って、残された三岩区域の堤防に水越の溝を開くと、その区域内の海水は自ら排水されて外海の水平線までに水を減じた。そこで水越の溝を閉じ固めて今度は内面の堀下げ区域との境界の堤防を破ると三岩は、たちまち岩礁を砕き、こうして船が入港できる三尺堀下げ、外堤を除去して一切の工事は3月28日に至って完成した。そこにできたのは、東西200m、南北54m、深さ千潮時には8尺、この時代の出入も自在ならしむる港であった。(図2参照)その時の工夫36万5000余人、金額、黄金1990両と「室戸湊記」は記載しており相当の人数と規模をもって行われたことを推測せしめられるものである。いずれにせよ、兼山の築港技術は当時として得られた材料を用い如何に築港を施行したかをここに見ることができる。それとならんで、その構造配置に関し、よくその場所に於ける要請に試みており、同時に兼山は数多くの工事の施行の中で儒学の本領として常に実践にたつたことを示している。

津呂港改修を自賛して「室戸湊記」の冒頭に「坎者地中天氣容之象、而天一之謂也、天運窮ラ包天地之間オ絡レ物トシテ無ク不ルレ存ラ、人トシテ不能ハ一日モ因リテ之ニ不ルレ生キ、而或ハ嬰レ害ヲ、昔者聖人象於卦澳取リテ以来、茫焉際ニ天地ニ、則チ船レ之浩然赴壑、則梁レ之ニ随ニイテ其宜ニ不レ嬰ニ其害オニ矣(略)」と儒教主義の自然観を述べるとともに、人間はそれに依存するのであるとする。しかし人間は自然の秩序に従いながらも或いは、船により、或いは橋によって自然の利害を人間的に調整する。この場合、人間は自然に対して独自の地位をもつものと認められる。こうした人間主義、合理主義は、同書で更に説かれている。「昔人言フニ有リ、天地雷電草木、人之能不為、人之陶ニ治舟車ニ、天地亦不能レ為レ之、是於テ



人事之功用ヲ見ルニ、有リレ可<sub>三</sub>キニ以テ補<sub>二</sub>助ス他工之不<sub>レ</sub>ル及バ者ヲ<sub>一</sub>。と述べ、自然と人工の対比をはっきりと示す。すなわち、自然に独自の世界があるように、人工にも自然の及ばない世界がある。そこには自然の欠陥を補うことが必要なのだ。こうした人工による人間社会の発展を、土佐藩の国土開発の理論的根拠として南学に見出した哲学を背景に開発を進めたのである。<sup>(13)</sup> ともあれ、こうした人間主義を、すべからず兼山の政治的、政策的実践に結びつけたところに兼山の築港政策の意義がある。こうした政策理念で遂行された、津呂港は、特殊の築港技術とともに、我が国初の堀込港と呼ばれている。かくして、海港で待機が可能となり、土佐と上方との海上輸送が頻繁となったことは否定できない。平尾道雄氏の『土佐藩商業経済史』<sup>(14)</sup> はその交易の様子を京都の錦織、近江の絹物、松山の木綿、大阪の呉服類、小間物、薬種類、藩州赤穂の塩、備前の醤油等の出入が活発化したとしている。一方、土佐からは、木材及び鯉節が上方へ積出されたのである。<sup>(15)</sup>

その後、港湾修築は津呂港の技術をして踏襲したことは疑を入れない。

図2 津呂港築港工程図

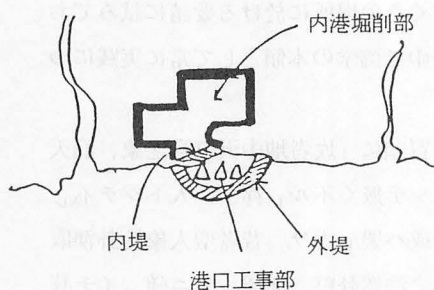
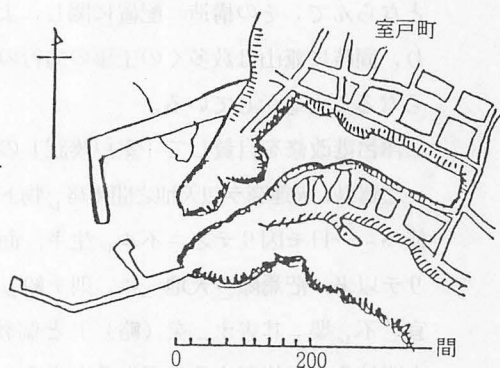


図3 室津港



(注) 日本国土開発編「船泊」による。

(注) 広井 勇「日本築港史」による。

兼山はその後津呂港から3キロ余離れた室津港の建設を計画したが、同港は兼山の死後兼山の片腕とされる一木権兵衛に<sup>(16)</sup> によって、延宝7年(1679)

に完成された。室津港についての詳細は省略するが、東西250m、南北76mと兼山の堀込港でも最大規模といわれ、設計についても新しい進歩がみられるのである。(図3)

③次に柏島港について述べよう。

柏島港は、土佐国の西端豊後水道にあり柏島という小島である。

同港は風波のたびごとと土砂を洗い取られるということしばしばであった。<sup>17)</sup>従って、年月の経過とともに全島が浸われ、土地が流失するという事態が起きる為、兼山は島の北及び東北の海岸に長さ6町20間、堤敷6間、高さ1間4尺の防波堤を築いたのである。島民の居住する全部を囲み、延長島周りの五分の一に及んだといわれる。

いうまでもなく堤防は、破堤の少ないことが築港技術の欠くことのできない条件である。堤防の破壊を防ぎうる技術が成立すれば、農民にとっての年々の収穫を可能にする一方、生産力発展の一步にもつながるものである。それを通じて領主財政収入の安定、増大を期待しうるであろう。それがため、堤防の築造などは地域農民にとって必要不可欠とともに兼山政権の安定にとっても急を要する課題であった。

もっともこの工事が何時頃形成され、又その規模、工事費及び農民の労役の人数など一切資料的に明らかでない。

だが堤防の築造などは農民の経験の積み上げ及び、自然の観察と永年の経験の蓄積などが求められることから、単なる技術的な知識だけでは実現し得ない経験的な性質をもっており、そこには土地の人々の協力があったことに基づくものであったといつてよい。事実前にも述べたように、兼山は「室戸湊記」の中でも触れており、<sup>18)</sup>文字どおり、兼山が幕藩体制の機構の中で村落支配を強め、農民を統制することが経済上の有利と意図していたことは当然推測されよう。(以下紙幅の関係で浦戸港については省略する)

注(1) 大石慎三郎「日本近世社会の市場構造」岩波書店 1975年 23～24頁

(2) 平尾道雄「土佐藩」吉川弘文館 昭和36年 75～77頁

(3) 中井信彦「幕藩社会と商品流通」塙書房 昭和46年7月 134～168

頁参照せよ。

(4) 広井勇「日本築港史」丸善 1927年 14～16頁

(5) 横川末吉「前掲書」 147～148頁

(6) 土木学会編「明治以前日本土木史」 本書には多くの諸藩の事例が記載されている。

(7) 高知県内務部編「野中兼山先生の遺業」 大正元年 高知県 28～35頁

(8) 「手結浦日抄」(「野中兼山関係文書参照」)

(9) 辻・小関「前掲書」 81～82頁

(10) 「南路志」には「其許材木の直段相替義モ之無、安芸、奈半利、羽根、吉良川、崎ノ浜、野根、甲浦ヨリ上セ候分一材木並びに肴の分一、何モ上着次第払ノ由吟味シテ尤ニ候。…以下略…」と安喜郡の海岸一帯から大阪市場に多くの材木が積出された。

(11) 平尾道雄「土佐藩商業経済史」によると大阪長堀白髪町の土佐藩蔵屋敷は藩営商業の出先機関として重要な役割をはたしたといわれ、元和8年には最も活発化したといわれる。同書を参照されたい。

(12) 「室戸港(湊)記」は兼山の唯一の書といわれ「野中兼山関係文書収」、以下の記述は同書による。

(13) 横川末吉「前掲書」 55～57頁、寺石正路「南学史」 282～283頁

(14) 平尾道雄「前掲書」 102～106頁

(15) 平尾道雄「前掲書」 110～116頁

(16) 横川末吉「前掲書」 106頁

「香我美郡志」によると、兼山に郷士の組頭に起用され、土木関係で頭角を現わし用水路の技術、室戸港の改修など責任者として業績をあげた、とある。同書参照

(17) 西内青藍「海南偉業史論」 富山房 118～120頁

(18) 高知県文教協会「野中兼山関係文書」所収、参照されたい。

#### 4. おわりに

以上、兼山の土佐藩における諸政策並びに築港事業について述べてきたが、それらにおいて幾つかの問題をみることができよう。

まず、兼山の評価についてである。既述したように兼山の土佐藩政につくした評価は、当時の社会経済的制度の上において、客観的情勢を考慮すれば正当に評価しうるものである。築港についてみれば、我が国最初の堀込港を修築するなど、港湾技術史に与えた影響はむしろ大きいといわねばなるまい。その他各種の諸事業は、まさに土佐藩にとって新しい体制づくりの発足を意味した。

しかしながら「室戸湊記」にも述べられるように、津呂港の修築には膨大な労役と莫大な資金を調達する一方、兼山の領内開発及び諸事業が土佐藩全域に拡大、進行した事業を見る限り、それはさらに莫大なものになる。こうした事態は、藩財政を大きく侵食していった。その結果、多くの土木事業、築港のしわ寄せは、兼山を矢脚させる事態まで引き起こした。その背後には彼の独裁ともいえる、強い指導制、ならびに政策の限界もあった点を考えねばなるまい。しかしながら兼山の強い性格が反映したことも見のがせない。

しかしこれまでみてきた政策は、土佐藩政を、当時の幕藩体制という支配機構の中で執政者として把える必要があろう。

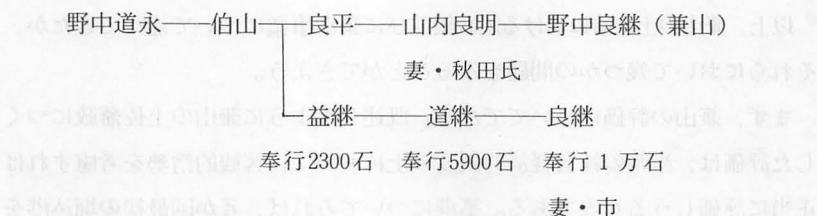
その意味からすれば、兼山の政策は執政者として一定の確固たる前向きの姿勢でおし進められてきたと考えてよいであろう。

そして、この事実を、たんに兼山の政策としてではなく土佐藩にとって、その後の築港技術の変化をみれば、兼山の港湾史上における名を逸することはできないのである。

(後記)

小稿は全体として史料の制約により、まとまりに欠けているが、表面的な一、二の問題提起に終ってしまった。また紙数の制約により十分な説明ができなかった点にもある。御了承願いたい。

## —野中家の系図—



## —兼山関係史年表—

- 元和元年（1615）。野中良明の子として播磨国姫路に生まれる。
- “ 2（1616）。兼山の家また京都にうつる。
- “ 4（1618）。父良明死（兼山4才）母とともに土佐に移り直継に頼る。
- “ 7（1621）。直継中心に元和改革はじまる。
- 寛永 6（1629）。この頃直継の養子となる（？）
- “ 8（1631）。直継とともに奉行職に任ぜられる。
- “ 13（1636）。直継死し、兼山野中家を継ぐ。
- “ 14（1637）。兼山禅学をすて儒に帰す。
- “ 15（1638）。本山地方に用水路を建設する。宮古野井開堀に着手する。
- “ 16（1639）。山田中井川竣工
- “ 17（1640）。室津港を開く。郷土制度を興す。
- 正保元年（1644）。野市上井川竣工
- “ 2（1645）。山田上井川竣工
- 慶安元年（1648）。八田堰弘岡井川筋工事開始。浦戸港を改修する。
- “ 3（1650）。火葬の禁。手結港開さくを計画。
- “ 4（1651）。津呂港改修工事始まる。母秋田氏死す。
- 承応元年（1652）。後免町取立。手結港修築。弘岡井筋工事竣工。
- “ 3（1654）。鎌田堰着工
- 明暦元年（1655）。高岡井筋工事進行。父養寺川竣工。手結港完成す。
- “ 3（1657）。新斛を定め量制を統一す。米価安定する。
- 万治元年（1658）。舟入川竣工
- “ 2（1659）。高岡井筋工事進捗。兼山出府。山田開墾地に町分を形成。
- 寛文元年（1661）。兼山津呂港竣工。兼山幡多郡巡行。専売制度実施。室津港改修。
- “ 3（1663）。藩札発行。奉行職解任。兼山中野に隠居。12月急死。